

2020年12月20日 クリスマス礼拝説教要旨

マタイによる福音書 1:18～25 「その名はインマヌエル」

高井 卿 介

I. 夢見る人ヨセフ

本日の箇所的主人公はマリアではなく、マリアの夫ヨセフである。そのヨセフの特徴は「夢見る人」ということであろう。神はヨセフに夢の中で天使を通して語っておられる。

「主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。』」(20b)と。

これによってヨセフの心の中にあった、婚約者マリアへの疑惑、戸惑い、怒りなどが雲散霧消した。

それにしてもヨセフはマリアの聖霊による懐妊という、前代未聞の出来事を聞かされたのである。彼がそれを納得することが出来たのは、「主が預言者を通して言われたことが実現するためであった」(22節)と聞かされたからである。その預言とは23節にあるイザヤ7:14であった。

更に、夢の中でのヨセフに対するメッセージが続く。マリアが生む男の子に「イエス」と言う名を付ける事であった。「イエス」とはヘブライ語では「イエシュア」で、その意味は「主は救い」である。これはイエスの使命を予告していた。

II. もう一人の夢見る人ヨセフ

聖書にはもう一人、ヨセフという名の「夢見る人」がいることを忘れてはならない。それは族长ヤコブの11番目の息子のヨセフである。彼は10人の兄たちに自分が見た夢の話をして彼らの神経を逆なでさせて怒らせ、隊商にエジプトへと売られてしまった(創世記37:28)。

しかし、ヨセフはエジプトで、ファラオが見た夢を解き明かして、ファラオに次ぐ地位に就くことになり、エジプトの豊作と飢饉の管理者となった(創世記41:41～41)。

そして父ヤコブの一族をエジプトに呼び寄せ、イスラエルの民は結局430年エジプトに住むことになった(出エジプト記12:41)。

III. 預言の成就としてのインマヌエル

ユダヤ人を対象とする福音書として書いたマタイは、イエスを「ダビデの子」と強調したと前回の説教で話した(9:27、12:3、15:22、20:30、31、21:9、15、22:42)。

もう一つマタイはこの福音書で強調しているのは、預言の成就である。ユダヤ人にイエスは、神が約束された「メシア」であることを納得させるには、預言者の語ったことばに訴えたのである。それが預言の成就ということである。

それを本日の1:22を始めとして、2:5、6、2:15、など10ヶ所にマタイは書いている。そのイエスについての預言即ち、メシア預言の一つが「インマヌエル預言」である。

「インマヌエル」の「イム」は「共に」、「ヌ」は「我々」、「エル」は「神」を意味していて、この3つの単語で、「神は我々と共におられる」という意味となる。

イエス・キリストの生涯は、まさに「インマヌエル」「神は我々と共におられる」の生涯であったと言える。イエスは最後の晩餐の後の説教で、弟子たちが自分から離れる時が来ると言われ、その後で、「しかし、父が共にいてくださる」と言われた(ヨハネ16:32)。